

璉城寺（紀寺）総合学術調査

要旨

璉城寺は奈良時代に創建され、平安時代に紀有常が再興したと伝えられている。本尊は女人裸形阿弥陀仏で、五十年に一回衣替えをする時に公開した秘仏といわれている。

この璉城寺で二〇〇五年から地域文化センターと日本文化史学科の共同事業で、璉城寺（紀寺）総合学術調査を実施してきた。

調査は現在古文書調査と発掘調査を行っている。古文書調査は住職下間家に伝来したものを整理しており、近世から近代にかけての宗教史について、貴重な資料が多数見出されている。本論では、璉城寺についてのこれまでの研究を整理し、新史料から下間頼和と石田敬起についての紹介を行った。

また発掘調査では奈良時代の瓦が多量に出土したことから、璉城寺が奈良時代創建であることが確実となった。

はじめに

本報告は、奈良市紀寺西町四五にある璉城寺（紀寺）で実施している総合学術調査の中間報告である。

この学術調査は大阪樟蔭女子大学地域文化センターと日本文化史学科の事業として、二〇〇五年に始まり、毎年夏休みに実施してきた。二〇〇六・二〇〇七年度は本大学の特別研究助成費の交付をうけた。また二〇〇七年度は日本文化史学科の「日本文化史総合研究」の授業を兼ねることとなった。

一 総合学術調査の経緯と調査体制

璉城寺は『璉城寺縁起』に奈良時代、行基菩薩の創建とされている。また平安時代にはいつて九世紀に紀有恒が再興したと伝えられている。宗派は当初法相宗、後に浄土宗となり、江戸時代は天台宗、昭和一九年に現在の浄土真宗となった。本尊は、平安時代に一条天皇の皇后上東門院の女人も往生できるかとの願いにこたえて、恵心僧都が作ったといわれている裸形女人阿弥陀仏である。阿弥陀仏の袴の取替えが五十年に一回行われ、その時公開された秘仏と伝えられている。住職は戦国時代、

佐久間 貴 士
長谷川 伸 三
荒 武 賢 一朗

本願寺の武将を務め、江戸時代に西本願寺の有力な坊官となった下間家である。

璉城寺は奈良時代には広大な敷地をもっていたと推定されており、江戸時代の絵図からかなり広い敷地をもっていたことがわかっている。明治二年の廃仏毀釈以後、二十石の寺領を没収され、寺地も縮小された。現在は本堂と庫裏、庭と墓地がある。山門入り口は狭いが、中は意外と広い。

調査は、佐久間が二〇〇四年に女人阿弥陀仏を拝観させていただいたおり、下間景甫住職が寺の歴史を知りたいとおっしゃったのがきっかけである。奈良時代の大寺であった璉城寺の実態は、周辺の発掘調査によっても、ほとんど明らかになっていないので、様々な角度から総合調査を実施することになった。私たちとしても、学生が古文書調査や発掘調査ができる場所を探していたので、総合調査を了承していただいたことは、たいへんありがたいことであった。

調査内容は古文書調査・発掘調査・石造物調査・什物調査などで、この三年間は古文書調査と発掘調査を主に行ってきた。また什物調査では、徳川將軍家の位牌が家康から家茂までそろっていることを発見した。なぜこの寺にあるのか謎を解くことも楽しみのひとつである。境内には「秀信大明神」「時丸大明神」の石碑が祀られており、この神様の実態もよくわかっていない。その他にも鎌倉時代から室町時代の五輪塔が残り、変わった形の観音立像の石仏があるなど、大変興味深い文化財が多数残っている。今後こうした文化財の調査も行う予定である。

調査組織は以下の通りである。

大阪樟蔭女子大学璉城寺（紀寺）総合学術調査団

代表 佐久間貴士 教授 考古学

調査指導 長谷川伸三 教授 近世史

堀 裕 准教授 古代史

荒武賢一朗 非常勤講師 近世史

中村直人 非常勤講師 中世史

調査参加者 大阪樟蔭女子大学学生・神戸大学考古学研究会などの学生・璉城寺友の会・歴史を楽しむ会・地域住民

調査期間は、

第一次調査 二〇〇五年九月三日から一四日

第二次調査 二〇〇六年八月二八日から九月八日

第三次調査 二〇〇七年八月二三日から九月七日

第一次・第二次調査は土・日曜日を休日にして、実働十日。第三次調査は八月三〇日から九月二日を集中講義のため休日とし、実働十一日であった。

また二〇〇六年度より調査参加者以外に見学会や市民の一日体験調査も行った。

二 文献に見る近世の璉城寺

近代から最近までの地名辞典・日本史事典から璉城寺に関する記述を集めてみた。そのなかで参考になるものなるべく全文を引用した。た

だし、古代に関する叙述とふりがなの多くを省略した。

一 吉田東伍著『大日本地名辞書・上方』（富山房、一九〇七年、第二版）

紀寺 キデラ

高島の西南を紀寺郷と呼ぶ、紀寺璉城寺あればなり。坊目考云、紀寺縁起曰、行基菩薩開基、号璉城寺、其後紀有常為再興、仍称紀寺焉云々、（中略）当寺は元来興福寺末なりし、近代誓願寺（浄土宗）門徒となり、享保中住侶罪を犯し一寺破滅す。

二 日本歴史地名大系第三〇巻『奈良県の地名』（平凡社、一九八一年）

璉城寺 「現」奈良市西紀寺町

崇道神社の西南に所在。常行山と号し浄土真宗遣迎院派。本尊は鎌倉時代の裸形阿弥陀像で平常は着物をまとっている。江戸時代を通して肘塚（かいのつか）村・法華寺村のうちに二〇石の朱印地を与えられていたが、「庁中漫録」所収の徳川家康朱印状は次のとおり。

和州連城寺之事為興隆於添上郡肘塚村・法華寺村之内二十石永寄附之寺中竹木進止不可有相違可専坊舎修造拙祈禱精誠者也

慶長七年壬寅八月五日 （朱印）

「奈良坊目拙解」には「本名紀寺 在於東側南端、寺領廿石 浄土宗先規誓願寺末寺、近世天台宗京大仏養源院末寺也」などとみえ、現高市郡明日香村に所在したと考えられる紀寺の別院としている。脇侍の木像観音菩薩立像は藤原時代、木像勢至菩薩立像は室町時代の作でいずれも国重要文化財。

三 『国史大辞典』一四（吉川弘文館、一九九三年）

れんじょうじ 璉城寺

奈良市西紀寺町にある寺院。正しくは璉城寺と書く。寺伝によれば行基の開基といわれ、のち紀有常によって再興されたので紀寺（きでら）ともいう。また一説には、天智・天武天皇のとき、百済や高麗の訳語にたずさわった渡来人が、この地に紀氏を檀越として一寺を創建したものともしられている。近世、浄土宗、京都誓願寺末寺で、寺領二十石をうけたが、享保八年（一七二三）法相宗興福寺と浄土宗誓願寺との間にこの寺をめぐる本末争論が生じ、寺領は没収された。以後天台宗に改め、同十四年に本堂を再興した。現在浄土真宗遣迎院派に属している。本尊は裸形の阿弥陀如来立像で、鎌倉時代後期の作。ほかに重要文化財指定の観音・勢至両菩薩立像がある。「大矢良哲」

四 『日本歴史大事典』一（小学館、二〇〇〇年）

紀寺 きでら

奈良市西紀寺町にある浄土真宗の寺院。遣迎院流。璉城寺ともいう。古代の紀寺に由来する。山号は常光山。本尊は鎌倉時代の裸形の阿弥陀如来像。天平年間（七二九く七四九）に聖武天皇の勅願で行基が開基、紀有常が八六六年（貞観八）頃に再興とされる。一七三五年（享保二〇）成立の「奈良坊目拙解」では高市郡明日香村の紀寺の別院で、石高二〇石、浄土宗の誓願寺末寺から天台宗の京大仏養源院末寺になったとする。脇侍の観音菩薩立像は平安時代、勢至菩薩像は室町時代の作でいずれも重文。〔吉井敏幸〕

近世の璉城寺について、以上の文献からわかることをまとめてみよう。まず所在地は古代の紀寺の広大な境内の一面とみられる。平城京左京五条七坊にあたる。崇道神社の西南に隣接している。

近世初頭に幕府から二〇石の朱印地を与えられている。朱印地とは、將軍の朱印状によつて年貢・諸役の徴収を認められた寺社領のことである。將軍の代替わりごとに前將軍の朱印状を示して所領の確認をうけた(『ワイド版角川新版日本史辞典』角川書店、一九九七年)。ちなみに現在璉城寺に歴代徳川將軍の位牌が置かれている(初代家康から一四代家茂まで、数代を合わせたものもあり、合計七基)。

資料二に、慶長七年(一六〇二)八月五日付の徳川家康より交付された朱印状が引用されている。朱印地は法華寺村に一三・四七石、肘塚村に六・五二五石、合わせて約二〇石となる。法華寺村(ほつけじむら)は平城宮の東に位置し、法華寺がある。近世では「法花寺村」か「法ヶ寺村」と書かれる。元禄郷帳では村高一八・九九一石で、所領関係は、春日衆徒領三八〇石・法花寺領二二〇石・海龍王寺領一〇〇石、ほか「南都寺々并屋敷共」で四八一石余である。璉城寺領はこの一部で、一三・四七石である。この村は全村寺社領で、しかも多くの領主によって細分されていた(『奈良県の地名』平凡社、一九八一年)。

肘塚村は奈良の市街の南縁部、中辻町の南に所在する。「かいのつかむら」または「かいなづかむら」と呼ばれ、「貝塚村」とも書かれる。慶長郷帳では、村高二三・一二二石、南都一三カ寺の朱印地として細分されていた。璉城寺領は六・五二五石である。地名の起りとされる肘塚(か

いなづか)は、奈良時代の僧玄昉(げんぼう)が築紫国で憤死し、その遺骸が飛来して肘(ひじ)の落ちたところに塚を造つたものとされる(『奈良県の地名』平凡社、一九八一年)。

資料三によると、享保八年(一七二三)法相宗興福寺(奈良)と浄土宗誓願寺(京都)との間に璉城寺をめぐる本末争論が生じ、寺領は没収されたという。この事件に関して、『改訂 大和志料・上巻』(天理時報社、一九四四年四一頁)に次の記述がある。

坊目考曰 当寺領二十石。当寺(分注略す)ハ元来興福寺末なり、中世已後誓願寺門徒末寺と成る。享保年住僧乱行にして寺産什物等を忍辱山来迎寺へ売て真言宗に改宗せんと欲す、本寺誓願寺より之ヲ止ム、元来 興福寺末寺たるを以て興福寺と誓願寺と争論に及んで享保八卯年十二月御朱印御取上無知行寺となる、可惜(惜)の悪僧は一且亡命逐電すといへとも、終に京都に於て禁獄の上追放せらる。

その後天台宗の京大仏養源院末寺になった。享保十四年に本堂を再興した。璉城寺伝来の古文書の調査により、近世の璉城寺の姿をより明らかにするのがこれからの課題である。

三 古文書整理作業の状況と史料紹介

璉城寺所蔵古文書は、同寺に伝来してきた「璉城寺文書」と、住職家によつて保存・管理されてきた「下間家文書」の二つの史料群から構成されている。点数では後者が圧倒的に多く、今回の古文書調査においても全貌を把握する見地から、下間家文書を中心に作業を進めている。以

下、整理作業の進捗状況と、調査によって明らかになったいくつかの重要史料を紹介したい。

調査の初発から保存状況にしたがい、下間家文書を一〇四に分類し、一点ずつ詳細な内容調査を作成、また同時に今後の良好な保存状態を確保するため、こちらも一点ずつ中性紙封筒への袋詰め作業（袋詰めを終えた文書は保存用文書箱へ収納）をおこなっている。これまで調査作成を終えたのは全体の半分程度で、今後は残りの作業とともに、文書目録化、および下間家文書の具体的分析を順次進めていく予定である。

【二〇〇七年九月調査終了時の確認点数】

* 时期的には江戸時代後期から昭和戦前期までの文書が中心である。

・「下間家一」……約六〇点

・「下間家二」……玄恵師関係（二七一点）、山崎書類（七五点）、永野書類（三二点）、その他（八二点）

・「下間家三」……（未着手）

・「下間家四」……約三〇〇点

下間家は代々本願寺門主の側近として仕え、江戸時代前期の元禄二年（一六八九）以降は「坊官」という職掌を得て、浄土真宗本願寺派（西本願寺）において末寺の統轄、末寺・門徒から本山への上申の取り扱い、そして朝廷・幕府・諸大名家との関係作りなど宗派運営の中枢を担った。坊官は定員三名（一時期四名）で、いずれも下間氏一門から選出され、当初は刑部卿家・少進家・宮内卿家の三家（「下間三家」と称される）

により、その後は別家した大進家・大式家・兵部卿家を加え六家によって構成された。現在、璉城寺に保存されている下間家文書は刑部卿家・大進家の流れを汲むものと推測される。

次にこれまでの調査で明らかになった重要史料の紹介をしておこう。

① 由緒・親族書関係 ― 十九世・頼和について ―

下間家文書には家祖宗重（兵庫頭、通称蓮位坊、由緒では清和天皇、源頼政の子孫と記す）から始まる同家の由緒書が数多く残されているが、とりわけ多くの関係史料を有しているのは、下間刑部卿頼和についてのものである。江戸時代後期に作成したものとされる「由緒并親族書」と「松平大蔵統書」によれば、頼和は松平大隅守乗友（三河国奥殿藩一万六千石の大名）の九男として生を受け、文政五年（一八二二）十二月、十九歳のときに住み慣れた江戸をあとに、下間大進家の養子として京都へ向かう。先代の大進は死去したばかりで、ひとまず民部卿家に身を寄せ、下間大蔵を名乗り、宗主御目見などの儀式をおこなった。同六年九月に「大輔頼和」、同八年九月には「刑部卿頼和」に改名し、翌年の門主大坂下向にも同行した。頼和は十四人（六男八女）の子宝に恵まれ、家督を相続する頼恭のほか、男子は肥前国平戸・光明寺、近江国大溝・勝安寺、有栖川宮家侍従・嶋岡家の養子となり、女子は幕府代官・角倉家、安芸国広島・光福寺、飛騨国古川・真宗寺などへ嫁いだ。頼和自身も武家の出身であり、またその子供たちも宗派内のみならず、朝廷や幕府関係へ縁を持ったことは下間家の坊官としての幅広い人的諸関係を裏付けるものといえよう。

② 石田敬起（大根屋小右衛門）との関係

家政・一門に關してのみならず、坊官の地位にあつた下間家には西本願寺に關する諸文書も多く残されている。そのなかには、文政十一年（一八二八）の「広如上人（当時の門主）御書之写」や、幕末期の京都を舞台にして起る文久三年（一八六三）八月十八日の政変を西本願寺の立場から綴った「夢物語」など、日本近世仏教史、政治史研究にも關わる一級史料が存在する。これらについては今後深めるべき課題として他日を期したいが、江戸時代後期の西本願寺にとって重要な人物・石田敬起（大根屋小右衛門）との關係を示す「石田小右衛門出播につき書状」の内容を紹介しておきたい。

石田は天明四年（一七八四）に摂津国豊島郡東市場村（現在の大阪府池田市）の岸上家に生まれ、大坂天満にあつた寒天仕入問屋「大根屋」の婿養子となつた人物である。さらに、大根屋が本業のほかには大名貸しと呼ばれる領主向け金融業を営んでいたこともあり、諸大名家の財政再建請負人としての活動を展開していた。一方、文政十年（一八二七）に第二十世門主となつた広如は、金六十万両にもなる借財の返済をおこなうべく外部から財政通の人材を招く方針を打ち出した。そこで石田が候補として浮上し、広如は文政十三年十月に下間刑部卿頼和を交渉人として大坂の石田宅へ派遣する。拒否する石田に対して頼和は粘り強く説得を続け、結果それが功を奏し翌月に石田は西本願寺で広如と対面、財政改革を受諾することになる。そして就任から五年の間に十五万両を返済し、宗派最大の危機を乗り切り、嘉永七年（一八五四）に隠居するま

で西本願寺の家臣として財政方を担った。

さきに示した「書状」は年月日、作成者は不明であるが、石田が西本願寺の財政改革に關わつていた時期と推定される。その内容は、同寺で財政再建策を実施している最中、播磨国山崎藩本多家（所領一万石）から広如宛てに、藩財政再建のため石田に協力を得たいとの要請が届き、それに応じて石田が播磨に出向く（史料中では「出播」と表記）ことを述べたものである。

以上が璉城寺所蔵古文書調査の進捗状況と、これまでに存在が確認された史料の紹介であるが、仏教史を中心に広く日本近世・近代史研究に寄与する貴重な史料群として、今後も全容解明に努力したい。

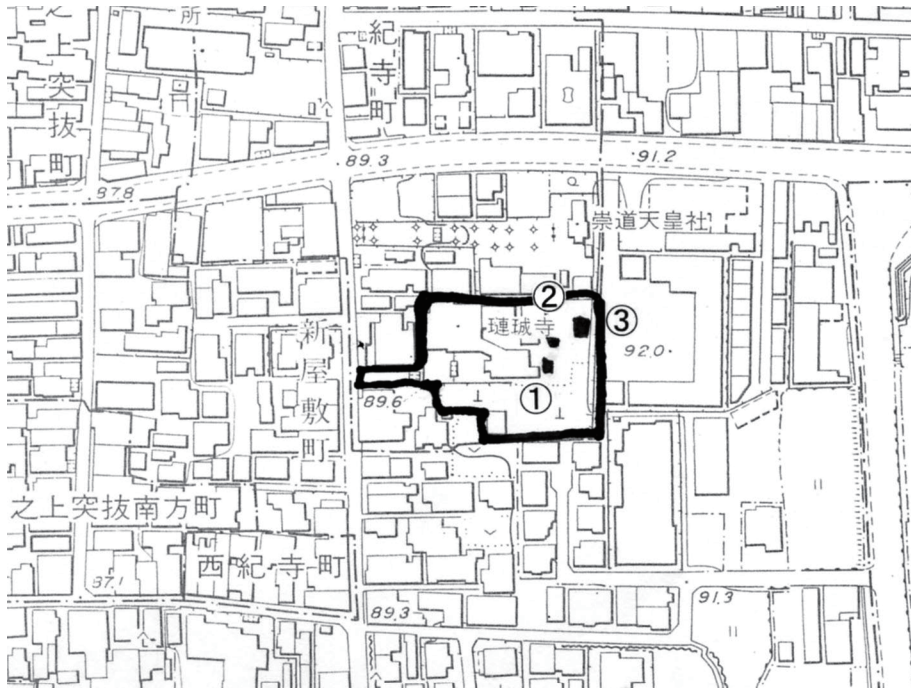
参考文献

- (1) 本願寺史料研究所『本願寺史』第二巻、一九六八年
- (2) 柏原祐泉編『真宗史料集成』第十一巻、思文閣出版、一九七五年
- (3) 名畑崇『本願寺の歴史』法蔵館、一九八七年
- (4) 中川すがね『大坂両替商の金融と社会』清文堂出版、二〇〇三年
- (5) 池田市立歴史民俗資料館『開館二五周年記念特別展図録 なにわのスーパーコンサルタント―大根屋小右衛門の財政改革―』二〇〇五年

四 発掘調査の概要

第一次調査は本堂裏側（東側）の庭に二m四方の第1区と東西二m、南北一・五mの第2区を設定した。第二次調査は、東側の敷地境の六十から七十cm高くなっている地点に東西四m、南北三mの第3区を設定

した。東南隅は土層図を取るため1m四方拡張した。第二次調査では、第3区を完掘できなかったため、第三次調査では、第3区を継続して調査した(1図)。東側は約1m拡張したので、東西は5mとなった。



(a) 調査区の状況

第1区

層位は第1層は表土(厚さ15cm)、第2層は灰黄色粘土質土(厚さ20cm)。第2層から奈良時代の平瓦1点、土師皿1点が出土した。中世の堆積層と判断した。その下が地山で、地表下35cmと、浅い位置で検出された。西側半分は昭和(戦前)のごみ穴で、深さは地表から40cmであった。

第2区

深さ50cmまで掘削したが、全体が昭和(戦前)のごみ穴であったので、途中で掘下げを中止した。

第3区(写真1)

東側敷地境は本堂敷地より六十から七十cm南北に高くなっており、新しい墓地の予定地となっている。北側は墓地の予定をしていないとのこと、ここに第3区を設定した。層位は大部分が明治以降の盛土で、厚さ七十から九十cmあった。その下に灰青色砂質土があり、厚さ十から二十cm。室町時代の堆積層である。この堆積層の上面に近代のごみ穴が三ヶ所あった。

調査区西側は、幅1mにわたって10cmほど地山面がならかにさがっており、大量の中世遺物を出土した。中世の南北溝の可能性はある。堆積の時期は室町時代である。

写真1 第3区調査状況



写真2 蓮華文軒丸瓦



(b) 遺物

出土遺物の量は第1区コンテナ一箱、第2区コンテナ二箱、第3区コンテナ二十五箱である。とりわけ第3区の盛土から多量の遺物が出土した。この盛土は東側にあった土塀を崩したものと推定され、大きく二層に分かれる。明治・大正期に一回、昭和(戦後)に一回土塀が崩されたと思われる。

第3区の中世堆積層からは奈良時代・鎌倉時代・室町時代の瓦や陶磁器・瓦器・土師器が多量に出土した。

第3区の遺物はまだ未整理だが、遺物の概要は以下の通りである。

古墳時代 須恵器

奈良時代 瓦、土師器

平安時代 瓦

鎌倉時代 瓦・白磁・陶器・瓦器・土師器

室町時代 瓦・青磁・陶器・土師器・硯(「赤間関」の線刻がある)

江戸時代 瓦・陶磁器・土師器

近代 瓦・陶磁器

(c) まとめ

これまでの調査の結果、奈良時代の瓦が多量に出土することから、璣城寺が『縁起』にある通り奈良時代創建であることが確実となった。ただ軒瓦が出土していないので、奈良時代のいつかは不明である。璣城寺にはかつて敷地内で出土した蓮華文軒丸瓦が伝わっている(写真2)。

平安時代は不明な点が多いが、鎌倉時代・室町時代の軒平瓦・軒丸瓦が出土しており、中世にも法灯を連綿として守り続けてきたといえる。

おわりに

璉城寺の総合調査が三年続いた。調査成果も少しずつあがっている。なによりも学生が生き生きとしているのが楽しい。

これはひとえに璉城寺下間景甫住職のお蔭と感謝している。また昼食の調理やおやつの段取りまでしていただき、まことに申し訳ない思いである。また璉城寺友の会や地域住民の方々には、調査の協力のみならず、調理の手伝いや差入れなどしていただき、厚く御礼申しあげます。

（付記）

執筆分担は、はじめに・一節・四節・おわりにが佐久間、二節が長谷川、三節が荒武です。